響き
No.85

〒590-0959
日本キリスト教団　堺川尻教会
堺市堺区大町西三丁一-十三
☎〇七二-二三二-三五三一

思い煩いは神に任せよ

塚本一正牧師

ペトロの手紙一　五章七節

「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。」（ペトロ一　五章七節）

思い煩うことの多い私たちにとって慰め深い珠玉の御言葉です。

「思い煩いは神に任せよ。」なぜこう言うことができるのでしょうか。それは「神があなたがたのことを心にかけていてくださるから」と言われます。では神はどれほど私たちのことを心にかけていてくださるのでしょう。それは神の子キリストが、私たちのために、まことの人となってこの世に降って来てくださったほどなのです。

芥川龍之介の『くもの糸』という短編があります。この中で神は（釈迦は）天から降ってきません。ただ一本の細いくもの糸が天から地に垂れています。人が天に入るには自分の力でこの細い糸をたぐって登って行かなければなりません。しかし登り切れません。小説では人間の間で一本の糸の取り合いが始まります。他の人を落とそうとするのです。その途端に糸はぷつりと切れてしまいます。皆真っ逆さまに落ちていくのです。

その一部始終をお釈迦様が天の極楽の池の淵から見下ろしています。お釈迦様は落ちていく人間を見て「浅ましいものよ」と悲しそうな顔をしながら極楽をぶらぶら歩いていきます。この小説の結末は、天は地上の人間の有様には頓着しないというものです。人間が浅ましく糸を奪い合おうと、皆落ちていこうと、天はそんなことには少しも頓着しない。お釈迦様の足元では何もなかったように美しい花がよい匂いを漂わせるばかりだったというのが結末です。ここに作者の深い絶望が示されているように思われます。

しかし聖書は語ります。神は私たちのことを心にかけていてくださると。それは神が私たちのために天から降って来てくださったほどであると。神は天にあって、私たち人間を放っておくことができず、居ても立ってもいられず、ついに神の子キリストがまことの人となって私たちの所に降って来てくださったのです。そしてキリストは、私たち罪ある人間を神のもとに取り戻すために、十字架と復活の救いの御業を成し遂げてくださったのです。これほど、神は私たちのことを心にかけてくださっているのです。

その神が、私たちに悪いことをなさるはずがありません。全てを益としてくださるに違いありません。「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」（ローマ八章）。この神を信頼して、思い煩いは何もかも神にお任せするのです。

私たちは自分の力で思い煩いを克服することはできません。信仰者であっても、思い煩わない人間になることなどできません。御言葉は「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい」と言っているのです。「お任せしなさい」とは「何かを何かに投げつける」という意味です。思い煩いを神に向かって投げつけるのです。自分にまつわりつくような思い煩いを、自分から引き剥がして、神に投げつけ、神にお任せするのです。思い煩って自分の内側に閉じ籠ってしまうのをやめて、自分の外に出て、神に向かい、神に全てをお任せするのです。そして、思い煩って手がつかなかった今日の自分の課題に、誠実に向き合うのです。それが神が私たちに望んでおられることです。キリストがこう言われるとおりなのです。「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である」（マタイ六章）。